

コラム

「腰折れ文」 十一、

渡邊澄子（会員）

前回からの一か月間の出来事は、後世の歴史に印されるだろう。その第一は七〇年余の分断を経て韓国と北朝鮮のトップが初めて手を取り合って軍事境界線を跨いだ南北首脳会談（4・

27）で、テレビ中継に釘付けされた。金正恩氏の言葉「対決の歴史に終止符を打つために来た」は感動的だったが、歴史の急転回は無理だろう。「負」の歴史に無知・無恥な安倍氏には

日本が分断に果たした責任の認識はないだろう。朝鮮半島を大陸侵略の踏み台として強制併合し、三五年にわたる植民地支配が日本敗戦で解放されたはずが米国の三十八度線での半島分断による「朝鮮戦争」（1950～53）によって一族離散の民族

の運命（バルチャ）に翻弄されることになったのだった。この戦争で米軍が日本の基地から出撃し、日本は砲弾輸出などで大儲けしたが、その砲弾によって

どれだけの人の命が奪われたか。安倍政権は「拉致、核、ミサイル」とお題目のように唱えているが、朝鮮半島の人々の立場に立てば、植民地時代の強制徴用（花岡事件はほんの一例）、徴兵（日本兵士として多くの特攻死者をだしている）、日本軍「慰安婦」等の歴史を忘れることは出来ないのだ。拉致問題の解決は植民地支配下の苛酷な侵略の「歴史」の清算（真摯な謝罪と補償）が先決で、それをなし得ずには解決しないだろう。米国は半島に核を持ち込み、

韓国と日本、とりわけ沖縄に大規模な基地と兵員を配備し続け軍事演習を繰り返し、沖縄県民を苦しめ続けている。朝鮮戦争の終結は六月十二日にシンガポールで開催予定の史上初の米朝首脳会議に続く、南北米の三者会談が邯鄲の夢で終わらず、「半島の春」到来を期待するのは愚だろうか。

初来日の中国首相・韓国大統領を最高級の待遇で迎えて開催された（5・9）日中韓首脳会議は、増幅一途の政權不信回復へのチャンスにしようとした安倍首相の思惑は外れて「日本は蚊帳の外」におかれ、指導力演出は失敗に終わった。パレスチナ流血事件の悲惨なニュースを連日目にするが、責任は米国大統領にある。その米国に日本は加担している。北朝鮮の脅威を煽ってJアラート訓練がなされ予定されているがどうかと思う。戦争の出来る国への予行演習か。

日本国内の政界は、モリ・カケさらに日報問題、恥ずかしすぎるトップ官僚や麻生氏をはじめとする閣僚のセクハラ問題の延々は、国民がうんざり感から無関心になるのを待っているかのようだ。膿の根源は安倍氏なのに。首相を守ろうとする官僚とは何と悲しい役職だろうか。セクハラ防止研修には赤面。

ノーベル文学賞発表見送りには「ブルータス、お前もか」で情けない。自衛官の暴言には驚愕だ。「文民統制」は看板だけだった。三佐って高階級らしい。沖縄の自然遺産登録延期は、日本の主権が及ばない米軍基地があるためという。米国の沖縄撤退を強く叫びたい。その闘争の象徴的な翁長知事（67）の退院にほっとした。闘いの先頭にたてる健康回復を祈りたい。マレーシアのマハティール首相は九十二歳。翁長氏はまだまだ若い。